青年−母親間で生じた親子間葛藤における解決プロセスの検討
──母親の個人内葛藤に着目して──

大　西　花　奈

子にとって両親は，誕生以来，最も身近な人間として関わってきた存在であり，成長とともにその関係性に変化を生じるが，青年期においてもその関係性は重要な意味を持つ。青年期の親子関係において，親子間葛藤は古くから研究されてきたテーマであるが，特に近年においては，青年と親による関係の結び直しの過程，つまり，親子間葛藤における解決プロセスについて関心が持たれている（e.g. 白井，2015）。先行研究においては，親が子に示す受容と自律性の保障（e.g. 藤松・野島，2002；杉村・竹尾・山﨑，2007）や，親子間で生じる情動変動性（Van der Giessen et al.，2014）に着目し，これらを親子間葛藤の解決プロセス促進要因であると示唆する。しかし，これらの研究では，親子間で表出される行動の背景にあると考えられる個人内葛藤の存在と，その解決プロセスに焦点が当てられていなかった。ここに焦点を当てることによって，葛藤解決プロセスのより断続的な理解を目指すことが可能となる。よって，本研究においては，(a) 親子間葛藤の解決プロセスの仮説モデルを生成すること，(b) 特に，個人内葛藤の解決促進要因を怒りの感情制御（吉田・高井，2008）の観点から明らかにすること，(c) 仮説モデルの理解を深めるため，語りから葛藤解決プロセスを，量的指標から精神的健康度，世代継承性，母親役割の受容および子どもに対する感情を明らかとし，その関連について検討することを目的とした。

青年期および成人期の子を持つ母親９名（平均年齢55.1歳（*SD* = 3.38），子の平均年齢25.33歳（*SD* = 2.62））を対象に半構造化面接と質問紙調査を行った。収集した語りについて，複線径路・等至性モデル（TEM）を用いて分析を行った。

分析の結果，親子間葛藤の解決に至るプロセスとして，多様な径路を含む仮説モデルを提示することができた。具体的には，怒りの感情制御方略の選択に応じ，四類型を明らかにした。Ⅰ～Ⅲ型は，初期には，怒りの一方的表出を行い，これが親子間（個人間）葛藤を生じる。しかしながら，行動もしくは認知的な変容過程を経て，視点転換の試みもしくは建設的表出という新たな，かつ適応的な方略を獲得し，〈母親が，基本的に子に任せる・見守る〉という姿勢をとるに至る。Ⅳ型では，初期からこの姿勢をとり，経過とともにその姿勢を強化していく様子がみられた。結果として，親子間（個人内・間）葛藤が解消される断続的なプロセスが明らかとなった。本研究で得られた結果より，先行研究の知見をつなぐこと，先行研究の知見に加え，複雑な母親の内的状態を描くことが達成された。

ただし，本研究で得られたモデルの一般化にあたっては，さらなる知見の蓄積が必要であると言え，この点が，今後の課題と言えよう。